

大阪インターナショナルチャーチ

アダム・キング

2013/04/14

中心聖句：ルカ9:23

すべてをささげて

ルカ9:23-25, 57-62

「私に従いなさい。」イエスの語られた言葉の中で、これほどシンプルかつ難しい言葉が他にあるでしょうか。イエスは多くの人々にこう語られます。聖書の登場人物だけでなく、今日の私たちにも語られます。今日は、すべてをささげてイエスに従うことについてお話したいと思います。イエスについて行こうともう決心しているから、今日のメッセージは自分に関係ないと思う人もいるかもしれませんが、関係なくはありません。というのも、口ではイエスに従うと言いながら、生き方がそれに伴っていない場合があるからです。すべてをささげてイエスに従う者というよりは、イエスのファンと思えるような生き方です。イエスは、私たちがファンになるようにと召してはおられません。ささげて従う者になりなさいと召しておられます。どこでも、いつでも、どんなことも、イエスに従うとはどういうことか、ともに見ていきたいと思います。

聖書朗読：ルカ9:23-25（新改訳）

9:23 イエスは、みなの方に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。9:24 自分のいのちを救おうと思う者は、それを失い、わたしのために自分のいのちを失う者は、それを救うのです。9:25 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分自身を失い、損じたら、何の得がありません。

この箇所2つのことに注目していただきたいと思います。まず、誰でも、イエスに従いなさいと招かれていることです。イエスは「だれでも」とおっしゃいました。「だれでも」というのは誰も除外しないということです。今どのような状態でも、過去にどんなことをしてどんな罪を犯したとしても、イエスはいとわれません。ただ、イエスに従ってほしいと望まれます。従いなさいと私たちに呼びかけておられます。黙示録にはこのような描写があります。イエスが私たちの心の扉をたたき、友になろうと呼んでくださる姿です。この中には、こう思っている人がいるのでしょうか。「そう言うのは簡単だ。でも私はイエスに従えない。今まで私がどんなことをしてきたか、どんな過ちを犯したか知らないでしょう。今もどれほど苦しんでいるか知らないでしょう。」そのとおりです。私は皆さんの過去の過ちや今の苦しみにして知りません。けれども、イエスは知っておられます。それでもなお、イエスに従うようにと招いてくださっているのです。どんな過去を持っていても、どんな悩みが現在にあっても、イエスは変わらず皆さんを愛しておられます。

次に、イエスに従うというのは一度きりの決心ではありません。日々自分の十字架を負ってついて来なさいとイエスはおっしゃいます。それは、私たちが日々、イエスに従う決心をしなければならないということです。イエスについていくのは、日曜日だけすることではありません。本当にイエスに従う者は、イエスについていくことを毎日選ぶのです。心からささげていないと、毎日イエスに従えません。献身して、自分の十字架を負い、イエスを追い求めるのです。

では、自分の十字架を負うとはどういうことでしょうか。それは、日々人間的な性質に死ぬということです。自分自身に死ぬことです。自分の野心や願い、将来設計、そういったものから手を放し、イエスに従うことです。イエスにすべてを明け渡して、イエスの御心や願われること、そしてイエスが持っておられるご計画に日々従うと決心することです。

イエスは、従うのが簡単だとはおっしゃいませんでした。たいへんなときも必ずあると言われました。イエスに従うのが自然にできるときもあるでしょう。けれども、たいへんなときにこそ、本当にささげて従っているかが試されるのです。たいへんなときもへこたれずにイエスについていく心づもりがあるのでしょうか。それとも、もうしんどいとくじけてしまうのでしょうか。

ルカ9:57-62に、3人の人が登場します。3人はそれぞれイエスについて来なさいと呼ばれました。イエスから直接呼ばれたのです。イエスがそばに来て、「わたしについて来なさい」と言ってくださるとは、なんともすばらしいことです。彼らはどう思ったでしょう。「救い主から直接ついて来なさいと言われた！もしついて行ったら、イエスと歩いたり話したりできる。イエスが行くところにいっしょに行ける。主がなさることぜんぶ見聞きできる」と思ったのでしょうか。皆さんならどうでしょう。今ここにイエスが入ってこられて、「みんな、わたしについて来なさい」と言われたら。すぐさま立ち上がって、「行きます！これからどうなるか楽しみです」と言うのでしょうか。しばらく座ったまま考えるのでしょうか。「おもしろそうだけど、ちょっといろいろ考えさせてください」と言うのでしょうか。みんなが立ち上がってイエスと一緒に行くことを願いますが、イエスについていくのを拒む人もきつっているでしょう。そこには犠牲がともなうとわかっているからです。イエスについていくことについて語る個所があります。ともに読みましょう。

ルカ9:57-62（新共同訳）

9:57 一行が道を進んで行くと、イエスに対して、「あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」と言う人がいた。9:58 イエスは言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巢がある。だが、人の子には枕する所もない。」9:59 そして別のの人に、「わたしに従いなさい」と言われたが、その人は、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った。9:60 イエスは言われた。「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。あなたは行って、神の国を言い広めなさい。」9:61 また、別の人も言った。「主よ、あなたに従います。しかし、まず家族にいとまごいに行かせてください。」9:62 イエスはその人に、「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」と言われた。

彼らの名前はわからないので、ひとりめの人をどこへでもさんと呼ぶことにしましょう。この人は、イエスのところに来てこう言います。「あなたのおいでになる所なら、どこへでも従って参ります。」ずいぶんりっぱな発言です。イエスがどこにいったとしても、どこに行くように命じられても、ついていく覚悟があると言うのです。どこへでもさんは、真剣にイエスに従う者のようです。すべてをささげ、イエスとともにどこまでも行こうとしているようです。けれども58節で話が変わります。イエスは彼のほうを向いて「言っとくが、私はホームレスだよ」と言われます。この言葉に、どこへでもさんは困惑します。こんなふうに問いただしたかもしれません。「えっ、なんですって。ホームレスと聞こえたように思ったのですが。」イエスはこう応えられたのでしょうか。「そうだよ。わたしはあちこちを転々として、自分の家と呼べる場所はない。それでもわたしについて来るか。」結局どこへでもさんには、どこへでもイエスについて行く意志はありませんでした。快適な家と暖かい布団を捨ててイエスについていく心の準備ができていなかったのです。ホームレスとして生きる心づもりがなかったのでしょうか。ここでご承知いただきたいのは、私たちが家を捨てて路上生活することをイエスが望んでおられるわけではないということです。ここでイエスがこの男性に望まれたのは、快適な領域から踏み出すことです。この人が本当にどこにでもついて行く気があるのかどうか、イエスは試しておられたのです。私たちも同様、イエスについて行くと決心すれば試されるでしょう。人生すべてにおいてイエスに従うようにと、私たちは召されます。私たちはどこへでもイエスについて行こうと思えますか。

家庭内でイエスに従う気がありますか。それとも、イエスの十字架を玄関に置いて、「イエス様、愛してますけど、ここでしばしのお別れです。また明日出かけるときよろしく」と言うのでしょうか。家庭内での私たちの生き方は、イエスに従う者の生き方らしいのでしょうか。家での言動は、キリストに従う者としてあるべき態度でしょうか。

職場ではどうでしょう。職場でもイエスに従っていますか。それとも、車の中か電車の駅でイエスを待たせてこう言っていないか。「イエス様、悪いけど職場に来てもらっては困ります。いろいろ都合が悪いので。」職場の同僚は、あなたがイエスに従う者だと知っていますか。仕事のやり方がそれにふさわしくないということはありますか。公正な取引をしていますか。同僚に思いやりを持って接していますか。上司に敬意を表していますか。

イエス様、あなたに従う気はありますが、こちらの都合で動けるようにちょっと脇にどいてもらうこともあります、という言い分は通りません。イエスに従うことに妥協は許されません。この男性の応答と、マタイの反応を比べてみましょう。ついて来なさいとイエスに呼ばれたマタイはどうしたでしょう。すぐさま立ち上がって、何もかもそのままにしてイエスについて行きました。マタイにとって、これは簡単な決断ではありませんでした。マタイは取税人でお金持ちでした。役人だったわけですから、きっと福利厚生も手厚かったことでしょう。それでもマタイは、どこまでもイエスについて行こうと思いました。仕事も家も捨て、家のない弟子としての人生を歩むことをよしとしたのです。あなたは、イエスの召されるどころどこへでも行こうと思いますか。

どこへでもさんが去っていくと、次はいつでもさんがイエスに招かれます。この人の名前もわかりません。もしこの人がイエスの招きを受け入れていたら、きっと名前が聖書に残っていたでしょう。イエスは彼を呼んで、わたしについて来なさいとおっしゃいます。ここで注目していただきたいのが、いつでもさんの応答です。イエスを「主」と呼んでいます。この男性は明らかにイエスが誰なのかを知っていて、召しに応じてついていくことを真剣に考えていると見られます。けれども、たったひとつ踏ん切りのつかない理由がありました。イエスについていくにはタイミングがよくないというわけです。彼はまず、父を葬ってからにしたいと思いました。理解できる話です。イエスとて、この人が父を葬るのに異議はないでしょう。しかし、イエスは異議を唱えられました。なぜでしょう。これが弁解だからです。正当な内容かもしれませんが、弁解に変わりありません。正当な弁解であっても、イエスはそれに耳を貸すおつもりはありませんでした。大切なことであっても、イエスの目にはむなしい弁解に映ったのです。

私たちに重要に思えることも、イエスにはそれほど重要ではありません。ついて行かないことを釈明しても、イエスには浅はかな言い訳に聞こえます。こっけいなことに、この会話が交わされたとき、いつでもさんの父親はおそらくまだ死んでいなかったといわれています。つまり、「あなたについて行くのは後にさせてください。父が死んだら、あなたについていくかもしれません」と言っていたわけです。もう少し自分のしたいことをしてから、あなたについて行くということです。イエスに従うのに好都合な時期を見計らっていたのでしょう。けれども、イエスについて行くのが都合のよいことだとイエスは一言もおっしゃいません。イエスについて行くことは、ときに不都合なことであれば、私たちは認識しておく必要があります。

いつでもさんとペトロの応答を比べてみましょう。イエスがペトロを呼ばれたとき、ペトロはどうしましたか。舟で座って、イエスについて行くことのプラス面とマイナス面を吟味したでしょうか。「イエス様、来週また来てくれますか。大漁の日が続いているので。こんなに獲れたことは今までなかったし、魚が獲れなくなるまで漁を続けたいのです」と言ったのでしょうか。いいえ、ペトロは舟を残してすぐにイエスについて行きました。ペトロは次の日や翌週まで決断を先延ばしにしませんでした。すぐさま立ち上がってイエスとともに行ったのです。ペトロにとって好都合なときではなかったでしょう。漁の季節が終わるまでイエスが待ってくれたらうれしかったでしょうが、イエスはそうされませんでした。ペトロが献身しているかどうか見ておられたのです。ペトロは何よりも良い決断をし、イエスについて行きました。

あなたはどうでしょう。今日イエスについて行かない理由は何ですか。今日ついていくのを阻むものは何ですか。私たちは、イエスについて行くことをダイエットや運動と同じように扱ってしまうことがあります。「明日からエクササイズして、健康な食事をしよう」と言うけれど、次の日になるとまた同じことを言います。そして、次の日も、またその次の日も、と先延ばしにして、エクササイズを始める明日は永遠にやってきません。明日からイエスに従おうと言うときも、同じことが起こります。イエス様、明日からあなたに従います、と言っていると、たくさんの祝福を取り逃してしまいます。すべてをささげてイエスに従うという人生にとまなう多くの祝福です。イエス様、あとで従いますから、と言いつけても、その「あと」は永遠に来ないではありませんか。

イエスについていくという招きには、今日中に至急返事を、という注記がついています。明日でも来週でも来年でもありません。今日、今すぐです。誰にも言えない罪をイエスに明け渡すのは、今がチャンスです。イエスに自分の悩みを打ち明けるときです。困っている人に惜しみなく助けを施すのは、今です。近所の人にイエスのことを伝えるのは今です。今、自分がイエスに従う者だと同僚に知らせるときです。聖書の学びに加わるのは今です。教会での奉仕を始めるのは今がチャンスです。イ

イエスについて行くのは、今です。今こそ、弁解するのをやめて、すべてをささげてイエスに従う者になるときです。

いつでもさんが去ると、今度はなんでもさんがイエスのところに来ます。なんでもさんは、イエスについて行くと言います。しかし、彼も弁解をします。家に帰ってみんなに別れの挨拶をしたいというのです。当時の文化では、ちょっと家に立ち寄って、イエスについていくのでさようならというわけにはいきませんでした。そうすると、数週間も続くような送別会が開かれたりします。つまり、この人もイエスに従う時期を先延ばしにする方法を探していたわけです。イエスはどうか応えたでしょう。「後ろを見るな」と言われました。鋤で土を耕すときは前をまっすぐに見ます。後ろを見ていると、あぜが曲がって使い物になりません。後ろではなく前方に集中しなければならないのです。

ここでイエスが言っておられるのは、イエスについて行くなら、他のものに注意を奪われてはいけないということです。イエスについて行くとは、残してきたものには目をくれず、イエスにしっかり目を向けることです。イエスを見たり、この世を見たり、ときよろきよろすることはできません。イエスに従う者は、後ろを見ず、すべてをささげてついていく必要があります。

イエスに従っていくつもりだと言いながら、何かがささげきれないことはよくあります。そこにだけはイエスに触れてほしくない、明け渡したくないという部分です。「あなたに**90%**はおささげします。だけど、この**10%**は私の自由にさせてください」という考えです。洗礼式について、おもしろい話を読んだことがあります。そこには、神にささげきれないものが描かれています。テンプル騎士団員が洗礼を受ける際、彼らは剣を持って洗礼を受けたそうです。しかし、剣は水に浸さなかったといっています。自分たちの体が水中に入るとき、水面上に剣を高く掲げていました。つまり、イエスに命はささげるが剣はささげないというわけです。剣の使い方は時もあり方も自分で決めるということです。剣は自分のもの、他はイエスにささげます、というのです。イエスに従うなら、そうはいきません。手放してもいいと思える部分だけでなく、すべてを主にささげなくてははいけません。

今日の私たちでは、剣が問題にはならないでしょう。私たちがイエスにささげていないのは、お金、パソコン、娯楽の内容、仕事、家族、奉仕、心の思いでしょうか。イエスは、ご自身に従う者の愛情が分散するのをお望みではありません。イエスのための時間とこの世のための時間と分けることも望まれません。今日イエスは私たちの人生をご覧になって、一番大切にしているものを指し、「これはどうですか。あなたはこれをも捨ててわたしについて来ますか」と問われます。「あなたの時間もお金もわたしにささげますか。子どもや仕事はどうですか。余暇もわたしにささげますか」とおっしゃいます。それら全部をささげてイエスについていこうと思いませんか。

旧約聖書に、エリヤとエリシャの話があります。列王記第一**19**章で、エリヤは自分の後継者としてエリシャを選びます。エリヤがエリシャを見つけたとき、エリシャは**24**頭の牛を使って畑を耕していました。それほど多くの牛を所有していたことから、エリシャが裕福であったことがわかります。エリヤがエリシャを神の預言者として選んだと伝えた際、エリシャはどうしたでしょう。「まず仕事を終わらせてください。それから後継者を育てて、それから市場に行って家族の必要なものを揃えて、それから義母に新しい家を見つけてあげて、それから学校に行って、その後ですね。**1-2**年後にもう一度来てください。そしたら準備ができています」と言ったのでしょうか。もちろん違います。彼は、すぐさま牛を屠り、農機具を焼きました。エリシャは家業を守ろうとはしませんでした。すべてをささげて召しに従ったのです。

イエスに従いなさいという召しを受け入れるなら、イエスを人生の最優先事項にするだけではありません。イエスを人生で唯一の優先事項にするのです。イエスは、私たちがすべてをささげ、主にのみ注目することを望んでおられます。私たちの仕事以上の時間、好きなスポーツチームに対する愛着以上の愛をお望みです。私たちの才能も誰よりもお望みです。イエスは私たちの最善を望まれます。イエスは私たちが後から思い出す存在ではなく、最初に思う存在でありたいと願っておられます。私たちにとって二番目ではいけないのです。

他のことをしてはならないと言っているのではありません。イエスはすべてご存知です。仕事や家族の世話をしなければならないことも、娯楽が必要なこともご存知です。けれども、そういったものを優先するなら、すべてをささげてイエスに従う者とは言えないということです。例えば、使徒パウロ

はイエスに従いながら仕事をしていました。けれども、イエスに従うことより仕事を優先させることはありませんでした。彼はテントを作っていました、福音を告げ知らせることが常に第一でした。

イエスのファンとイエスに従う者との大きな違いは、ささげている度合いです。ささげること、献身について、ひとつお話ししましょう。

1921年2月15日、ニューヨーク市立病院で奇妙なできごとが起こりました。ある患者が腹部に激痛を訴えています。医師はすぐさま虫垂炎と診断しました。エバン・オニール・ケイン医師の執刀で手術が行われます。ケイン医師は**37年間**で約**4,000件**もの虫垂切除を行った経験があります。この手術も、**2つのこと**を除いては、何の変哲もないものでした。

この手術が他に類を見ないものであった理由はまず、初めて部分麻酔が使われた手術だったからです。当時、手術には通常、全身麻酔が使われていました。ケイン医師はこの通例に異議を唱え、安全性の高いと信じる部分麻酔の使用を提唱しました。ケイン医師は手術での部分麻酔使用の実現に専心していました。医師の間では全身麻酔がより良いと考えられていましたが、他の医師たちと対立することもいといませんでした。とは言え、ケイン医師は部分麻酔を使って手術を受けてもいいと言う患者を見つけることができませんでした。しかし、その**2月**、ある患者が部分麻酔で虫垂切除手術を受けることを承知したのです。医療史上初の部分麻酔使用です。手術は成功しました。手術中、患者が感じたのは多少の違和感のみでした。二日間の入院後、患者は退院して日常生活に戻りました。部分麻酔の使用は成功したのです。

先ほど、他に類を見ない手術となった理由がふたつあると言いましたが、ひとつめは部分麻酔の使用です。ふたつめは患者です。その患者はケイン医師本人でした。ケイン医師は自分自身の手術を執刀することで、部分麻酔の使用に対する献身を示したのです。これこそ献身です。自分自身の手術をしてもよいと思うほど、部分麻酔使用の実現にすべてをささげていました。私たちはどうでしょう。イエスに従おうという願いに、これほどまでささげきっていますか。

今日最後に、皆さんにこのことを考えていただきたいと思います。

私はイエスについていく気があるだろうか。

どこまでも？ 家庭内や職場でも。

いつでも？ 都合の悪いときも。

なんでも？ すべてをささげてついていきます。